

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大川周明世界宗教思想史論集

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
大川周明世界宗教思想史論集 書肆心水
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書について

本書は大川周明（一八八六～一九五七）の三つの著作——『宗教原理講話』、『印度思想概説』、遺稿の『宗教論』——を再編成して一冊にまとめたものである。

第一部は、遺稿の宗教論と一九二一年刊行の『宗教原理講話』（東京刊行社）中の数章で構成し、第二部は、一九三〇年刊行の『大思想エンサイクロペディア第八巻』（春秋社）に収録された「印度思想概説」の全文である。

第一部に収めた遺稿は、一九六二年刊行の全集版で公刊されたもので、その構成は次のとおり。

- 第一 人格的生活の原則
- 第二 宗教の進化
- 第三 東西に於ける覚者の出現
- 第四 基督及び基督教
- 第五 近代に於ける基督教的信仰の変遷
- 第六 回教に於ける神秘主義（本文なし）
- 第七 仏陀及び仏教
- 第八 摩訶般若波羅蜜多心經（中斷）
- 第九 教祖・教法・教団
- 第十 人生に於ける宗教の意義（本文なし）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

全集版の編集委員註によれば、第五の章末までには通じでページ番号が記されていて、第六の章以降は章ごとに独立したページ番号が記されているので、第五の章までは脱稿したものと考えうるとされている。
この遺稿は全く新しく書き起こされたものではなく、『宗教原理講話』の訂正増補版と見るべきものである。『宗教原理講話』の構成は次のとおり。

- 第一章 宗教とは何ぞや
- 第二章 原始宗教に於ける崇拜の対象
- 第三章 初期に於ける宗教の進化
- 第四章 部族的宗教より司祭宗教へ
- 第五章 普遍宗教の出現
- 第六章 預言者の宗教
- 第七章 預言者としての老子
- 第八章 預言者としての孔子及びソクラテス
- 第九章 基督出現以前のイスラエル宗教
- 第十章 耶蘇の生涯
- 第十一章 耶蘇の宗教及び基督教（上）
- 第十二章 耶蘇の宗教及び基督教（下）
- 第十三章 仏陀以前の印度宗教
- 第十四章 仏陀の生涯
- 第十五章 仏陀の福音及び仏教の発達
- 第十六章 独逸に於ける宗教思潮

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第十七章 近代欧羅巴に於ける宗教思想の変遷

第十八章 教法、教祖、教会

第十九章 信神の意義

遺稿と『宗教原理講話』の記述内容を対照すると、遺稿の各章は『宗教原理講話』の各章をほとんどそのまま使用している場合と、『宗教原理講話』のいくつかの章から部分的に抜き出して合成している場合の違いはあるが、遺稿で新しく計画された「六・八・十」の三つの章（二つは未起稿で一つは中断）と第一の章を除く全てが『宗教原理講話』の内容と重なっている。

遺稿の第一の章「人格的生活の原則」は一九二六年に刊行された『人格的生活の原則』（東京宝文館）の改訂原稿と見るべきもので、内容は大川周明本人の宗教的道德思想の精髄を記したものである。単行本版の『人格的生活の原則』は書肆心水既刊（二〇〇八年）の『大川周明道德哲学講話集——道』に収録してあり、遺稿の記述はそれとほとんど同じであるので、本書には掲載しなかった。

以上の事情により、本書の第一部には遺稿の第二～第五、第七～第九を収め、さらに『宗教原理講話』にはあつて遺稿はない二つの章「第十六章 独逸に於ける宗教思潮」「第十九章 信神の意義」を補った。この第一部を括るタイトル「世界宗教思想史」は、本書刊行所が附したものである。

なお、『宗教原理講話』の「第一章 宗教とは何ぞや」の後半部分の内容は遺稿の幾つかの章に織り込まれているので、前半部分だけを本書の「序」として使用した。

（二〇一二年　書肆心水）

本書について

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

目 次

I 世界宗教思想史

序 17

宗教の進化 22

東西に於ける覺者の出現 43

キリスト及びキリスト教 63

近代に於けるキリスト教的信仰の変遷 79

仏陀及び仏教 109

摩訶般若波羅密多心經 130

教祖・教法・教団 141

ドイツに於ける宗教思潮 152

信神の意義 164

II インド思想概説

インドの地と人 173

インド精神の種々相 177

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

吠陀に現われたるインド精神	250
奥義書に現われたる哲学的思索	240
奥義書以後の思想信仰	227
インド精神の実践的方面	215
種姓制度について	209
現代インドの精神的復興	204
現代インドの政治的思潮	198
インド復興の将来	189

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

大川周明世界宗教思想史論集

凡例

一、底本には、『宗教原理講話』（一九二一年刊、東京刊行社）と『大川周明全集第三卷』（一九六二年刊、大川周明全集刊行会）を使用した。

一、本書は新漢字・新仮名遣いで表記した。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。

一、いくつかの語について送り仮名を加減した（例、横える→横たえる、傷ける→傷つける、今ま→今）。

一、読み仮名ルビを多少補った。

一、底本では鍵括弧に『』が使われているが、本書では「」に置き換えて表記した。

一、本書では遺稿部分（第一部）の章配列を再構成したので、底本における各章の章番号は省いた。

一、「」で括った註は本書刊行所が補ったものである。

一、中黒点を補ったところがわずかにある（例、マクスミュラー→マクス・ミュラー）。また「エレン、カイ」のような読点を中黒点に置き換えた場合もある。

一、アーリヤとアーリア、ショーベンハウエルとショーベンハワーのような表記の不統一は、第一部・第二部それぞれの部内においてのみ表記の統一を行なつた。

一、正誤を判断しかねる場合などに原文のままの意味で附す「ママ」のルビは（）で括って（ママ）と表記した。

一、仮名遣いの範囲外であるが、たとえば「進化てふ概念」というような場合における「てふ」は「ちよう」ではなく、便宜的に「という」に置き換えて表記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向にある以下の語を仮名表記に置き換えた（送り仮名と活用は代表例のみを示す）。亞細亞（アジア）、亞弗利加、阿弗利加（アフリカ）、雖も（いえども）、英吉利（イギリス）、苛くも（いやしくも）、愈々（いよいよ）、所謂（いわゆる）、埃及（エジプト）、埃及（エジプト）、斯か

SAMPLE Shoshi-Shinsen.com

る（かかる）、斯く（かく）、是く（かく）、曾て（かつて）、希臘（ギリシア）、基督（キリスト）、蓋し（けだし）、茲（ここ）、於是（ここにおいて）、悉く（じとごとく）、此（この）、是れ（これ）、之（これ）、此（これ）、併し（しかし）、乍併（しかしながら）、屢々（しばしば）、瑞西（イス）、須らく（すべからく）、其（その）、其（それ）、夫れ（それ）、度い（たい）、啻に（ただに）、忽ち（たちまち）、仮令（たとい）、独逸（ドイツ）、土耳其（トルコ）、乃至（ないし）、尚ほ（なお）、乍ら（ながら）、勿れ（なかれ）、就中（なんぞく）、巴利（パーリ）、只管（ひたすら）、緬甸（ビルマ）、仏蘭西（フランス）、普魯西（プロシア）、可し（べし）、波斯（ペルシア）、伯林（ベルリン）、孟買（ボンベイ）、哩（マイル）、亦（また）、儘（まま）、寧ろ（むしろ）、芽出度い（めでたい）、若し（もし）、齎す（もたらす）、固と（もと）、稍（やや）、動も（ややも）、猶太（ユダヤ）、欧羅巴（ヨーロッパ）、羅馬（ローマ）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

世界宗教思想史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

一切の人には、唯だ人のみが有する獨一無二の個人性がある、而してこの個人性を実現せんとの切なる要求がある。個人性の実現とは、一ありて二なき自家の特色を、実行の上に發揮する事に外ならぬ。境遇や感情に累わされて、ややもすれば如実の自我を傷つけるような言行に出で勝ちなるにも拘わらず、吾等のところの至深處には、自己に生きんとする根強き要求がある。従つて吾等に向つて眞の満足を与え得るものは、個人性の実現と云うこと以外に何者もない。「汝等善とは何ぞと問うか、我まことに汝等に告げん、勇気これのみ」と叫ぶニッヂエの声が、吾等の心弦をして共鳴を禁ぜざらしめるのも、唯だ勇氣即ち強大なる意志のみが、吾等の至深の要求たる個人性の実現を可能ならしめると云う拒み難き真理を高調して居るからである。吾等は金剛の意志を振作して、自己のみが成し得る仕事、自己のみが最も善く成し得る仕事に於て、飽迄も自家の眞面目を發揮せねばならぬ。われ汝等に働けと奨めず、唯だ戦えと勧む」とニッヂエが言える如く、人生は吾等の嚴肅なる戦場である。自家の特色を擁立して、勝利ある生命を獲得する為には、吾等の意志の發動を妨ぐる内外の敵に對して、慘憺たる苦戦を覚悟せねばならぬ。或人がカライルに向つて誰かの事を批評して「彼は悪人ではあるが強い人だ」と言った時、カライルは言下にこれを叱して「強いと云う事は既に善人なる証拠じやないか」と言つた。まことに彼の言える如く、吾等に取りて最も直接なる善は力で

I 世界宗教思想史

ある、勇氣である、強大なる意志である。

しかしながら吾等の生命は個人的であると同時に超個人的である。吾等は単に個人として存在するものでなく、又これに満足するものでもない。各々の個人が、一面に於て飽迄も独自の面目を發揮しながら、波瀾あり光彩ある人生を成して居るのは、恰も松島は八百八島の、そよだ敵つものは天を指し、臥すものは波に匍い、己がじしめでたき姿を競いながら、扶桑屈指の名勝を成して居るのに譬える事が出来る。さりながら数々の島に分れて姿も形も異なるのは、唯だ海上に浮んで男波女波にその岸を洗われる間に過ぎぬ。一度び波を沈んで底深く探し往けば、等しく一つ大地に根ざして、頭を飾る松の翠も、膚に纏う苔の衣も、所詮は同じ大地にその長養を托して居ることが知れる。吾等の生命もまたかくの如きものである。恰も八百八島が海上に分れて海底に一なる如く、千態万様を極めて互に相対立する個人的生命も、決して絶対的に独立して相互の間に何等の関係もなき孤立的実在ではない、個人的生命の背後には、これを統一する更に偉大なる生命がある。前者はその究竟の根拠を後者に求めねばならぬ。單に生理的に考えても、吾等の色身はもとこれ祖先の細胞の分裂に過ぎぬ。子孫の色身も同じく吾等の細胞の分裂に過ぎぬ。もしこの関係を前後に際限なく辿り往けば、一切の衆生はことごとく同一生物であると言う事が出来よう。而してこれと同様なる関係が、吾等の精神的生活に於て、更に幾層倍の複雑を以て行われて居る事は何人も拒み離き事実である。かつてゲーテは「独創家に与う」と題せる短かく美しき詩に於て、自分の思想が全く他人に待つ事なしと考へて居る自称独創家を、最も憐むべき愚人と罵倒したが、吾等の精神を忽然として生じて独自に発達したものと思惟するのは甚だしき謬見と言わねばならぬ。色身の場合と同じように、吾等の精神には、全人類の精神が宿つて居る。吾等の意識的活動は、總て更に大なる意識にその根拠を有して居る。いやしくも精神病者に非ざる以上は、何人の精神といえども、この大なる意識と無関係である事が出来ぬ。されば吾等の意識の至深處に沈み

行くに従いて、個人的色彩は次第に褪せ、超個人的色彩が鮮かになつて来る。かくの如くにして吾等は一切の個々の生命が、一個の偉大なる生命によりて統一されて居る事を認めるのである。

一切の生命が一つの靈泉から流れ出でた証拠は、人生の社会的なる事である。吾等は到底孤独の生活を送るに堪えず、またこれを送る事を欲せぬ。或は社会的生活を厭う隠遁者の数が渺なからざる事實を挙げて、吾等の言葉を拒むかも知れぬ。而して隠遁者自身等は、彼等の送る如き孤独の生活に於て、人生の最も深奥なる意義を認めると言うかも知れぬ。されど世を遁れると云う事は、決して厳格なる意味で孤独の生活を送る事ではない。かくの如き人々でも、若しくは自分の理想とする古人を尚友し、もしくは自分の心に未来の社会を想像するなど、必ず何等かの方法で精神的に共同生活を営んで居る。世を捨てて山に入りし西行すら、

淋しさに堪へたる人の又もあれな

いほり並べむ冬の山里

と歌つて居る。葉は落ちて根のみとなればとて枯木と思つてはならぬ。花を咲かせよと言わば咲かせもしよう。もと多情多恨の人間なれば、たとい世を遁れ人を棄てて山に入るとも、如何で朝暮に思遣なきを得よう。凡そ西行法師を始めとし、深草の元政、さては芭蕉翁の如き、生を風雅に托して塵寰を遠ざかれる世捨人等が、百代の後に及んでなお万人の心を殿として息む事なき伝道をなして居るのは何故であるか。けだし眞に世を厭うは、切に世を愛する人のみこれを能くする。その世を捨てたのは、世を思う切なる情に適わしきものを得なかつた為である。もし然らずとせば、流韻脉々として幾百年に亘り、その感化の爾く醇厚なる理由を了解する事が出来ぬ。世捨人を挙げて人性の社会的なるを拒むのは、這般の消息を知らぬ人である。いやしくも人間たる以上は、本具の社会性を如何ともする事が出来ぬ。強いてこれを抑えんとすれば、唯だ

I 世界宗教思想史

異なれる形を取りて現われるだけである。この社会性あるが故に、ここに吾等は共同的生活を営んで居る。

されば共同的生活とは、個人的生命が超個人的生命と交通融会する事である。換言すれば己れの生命を他の生命の上に、他の生命を己れの生命の上に実現する生活である。凡そ自我を以て単に個体の中に限らるる如く思惟するのは由々しき誤解である。吾等の生命は多かれ少なかれ他人の生命の中に入り込み、他人の生命もまた吾等の生命の中に入り込んで居る。而して自他の生命が互に融合し、且つ感化を及ぼし合う所に、相互の生命の完成がある。吾等の衷には、他は己れの為に、己れは他の為に生きようとする根強き要求がある。この要求あるが故に、吾等は自己以外又は以上の生命と交通せざれば止まぬのである。かくて吾等の生活は他人の為の生活で、他人の生活は吾等の為の生活となる。偉人とは、その獨一無二の個性を發揮する事によりて、通常の人よりも遙かに多数の人々の為に、且つ多数の人々の衷に生きると同時に、それだけ多数の人々が彼等を通じて生き、且つ彼等の為に生きて居る人々を云うのである。キリストが、首たらんとする者は僕たるべしと言ったのもこの意味に外ならぬ。

かくの如くにして生命と生命とが互に融合し憑依する事實を次第に追究し往けば、一切の個人的生命がこれに依つて存在し、且つこれに由つて統一せらるる偉大なる生命を認めねばならぬ。而して一切の個人的生命がことごとくその源を一にする事を認むれば、ここに四海同胞の観念が生れてくる。しかしながら吾等は此処に止まる事を以て満足せぬ。吾等は更に一步を進めて、ただに人類に於てのみならず、自然に於てもまた偉大なる生命の動くを認め、ここに自然と人生とを一貫せる最後の生命の存在に到着するのである。咲く花を美しと感ずるのは、花の生命と吾等の生命との間に交渉があつて、花が吾等の情緒に訴えるからである。即ち偉大なる宇宙の生命の種々相の一つが花に現われて、これが吾等の生命と相触れたのである。画家がこれを描き、詩人がこれを歌うのは、言葉又は色彩の力によりて、花の生命たる美を永遠に保存せんと欲

序

するものに外ならぬ。かくの如く吾等が花と対して相感應するのは、共に同じ泉より湧き出でたる生命なるが故なりと知れば、吾等と花との間に、単に外部に於てのみならず、内面的にも密接なる關係を生ずる様になる。而してこの内面的關係を、生活の事實として自身の生命の上に実現せんとの要求をも生じてくる。

自己以外もしくは自己以上の生命の存在を自覺して、自身の上にこれを実現せんとの要求、万有を統一する生命を認めて、これを自身の生命に攝し、自身の生命をこれに托せんとの要求、これが取も直さず宗教的要求である。もとより人類は当初よりこの統一的生命を認めはしなかつた。始めはその生命の種々相を個別に認めて、その間に殆んど何等の統一もなかつたが、次第にその各相を綜合し始め、遂に全相を綜合してここに絶対的生命に到達するのである。されば宗教的要求は自己に対する要求である、自己の生命に対する要求である、自己の生命の十全に対する厳肅なる要求である。而して宗教とはこの要求及びこれに伴う一切の精神現象並に社会現象の総括である。

*以上は一九二一年刊行『宗教原理講話』第一章「宗教とは何ぞや」の前半である。後半の記述内容は遺稿宗教論の幾つかの章に織り込まれているので省略した。

I 世界宗教思想史

宗教の進化

—

谷間の岩清水が、流れ流れて大河に注ぐまでには、あらゆる糺余曲折を経ねばならぬよう、「生命の流」と呼ばれる宗教も、吾等が現に今見るように姿を具えるまでには、幾多の変遷を経ねばならなかつた。宗教の客体たる神の観念、その主体たる人間の信仰、神人の関係についての解釈、神人交通の機関としての儀礼、さくては宗教の社会的発現たる教団の組織、縦てこれ等のものはかつて息むことなき変化を続けて今日に及んだ。恐らく今後も間断なく変化を続けて往くであろう。しかしながら宗教の形態は如何に变つても、宗教そのものは存在の始より終まで常住である。アリストテレスは、完全なる樹木は萌芽の前にあると教えていたが、恰も萌芽の発育につれて「萌芽の前にある完全なる樹」が次第に実現されて往くように、宗教の形態が不斷に変化して往く間に、宗教そのものの本来の面目が、次第に發揮されて來た。而してかくの如き常住の本体が、常に変化しつつ自己を実現し、且つ変化によつて自己に復帰することが取りも直さず進化と呼ぶる過程である。それ故に宗教が昔から今日まで、幾多の変遷を経て來たということは、進化のあらゆる段階を一步一步登つて來たということに外ならない。

SAMPLE
Shoshin-Shinsui.com

前代の人々は、宗教について真か偽かを知ろうとした。しかしながら吾等は一切の宗教を、宗教の一連鎖として考える故に、問題は真か偽かではなく、真なる程度如何である。言い換えれば、真理はいくばく顕現されているか、拒否せらるべき要素は何か、挙揚せらるべき要素は何かである。吾等にとりては、絶対的に真実なる宗教もなく、また絶対的に虚偽なる宗教もない。一切の宗教は多かれ少なかれ真理を含んでいる。而してその含蓄する真理の多少によつて高下の順序に排列され、一切の段階にある宗教が、みなそれぞれ意義と価値とを与えられる。

かように一切の宗教を、宗教そのものの進化の過程に於ける顕現として見る以上、如何なる宗教も理由なしに軽蔑し又は排斥される道理がない。低い階段にある宗教は更に高い階段の宗教を実現する為に必要なる過程であつた。そして高い階段の宗教が現るれば、設い低い階段のものはその存在の意義を失うとしても、その根柢に潜める真理は、高い宗教のうちに攝取されて、その欠くべからざる要素となる。かようにして最下等の宗教と最高等の宗教との間には、その形態や外觀に於て如何に甚しい相違があろうとも、太古の信仰の核心たりし至要の部分は、依然として最高宗教の中に生きたる力として存続する。

二

吾等は宗教の最後の心理的基礎が、人間がその親に対する敬畏と帰依の感情であること、従つて祖先崇拜が最も原始的な宗教形態であることを述べた〔人格的生活の原則〕における論述。現に父祖の靈魂の崇拜は、普く未開種族の間に行われている。吾等は死者の靈魂に対してもいろいろな宗教的行事を行つてゐる。死骸を埋葬する時には、彼が生前使用していた道具と一緒に埋め、奴隸又は妻が自ら命を絶ちて、主人又は夫の供をする。而して生き残れる家族は、彼等のために飲食・衣服を供え種々なる祈禱や儀式によつてその靈を慰め

I 世界宗教思想史

る。現に未開人の間に行われている死靈の崇拜に於ては、靈魂の不可思議なる力に対する畏怖の念が、最も力強き信仰の要素となつてゐる場合が多い。従つて死者の供養も、その崇りを恐れる利己的打算から出ることもあるし、また諸処の未開人の間には、死者との関係を絶つたために種々なる儀式が行われてゐる。しかしながら死靈崇拜は、もと死者に対する敬虔と愛慕の心から出たものであり、従つて恐怖の感情と同時に、常に信頼相愛の念が伴つてゐる。敬畏と思慕のこころから、子はその死せる父を供養し、彼死すればその子によりて同様に供養される。かくて死靈崇拜は父祖と子孫とを結び付ける紳となり、家族はその家の墳墓を中心として相集まり、多くの家族が更に共同の先祖を挙するようになれば、家族は即ち部族に発達し、死靈崇拜は祖先崇拜と呼ばれることとなる。

人間は肉体と靈魂との二つの部分から成り、肉体は死んでも靈魂はその存在を続けて往くという思想は、普く未開人の間に行われてゐる。多くの学者は、未開人の靈魂の觀念は、夢又は幻視から誘發されたものとする。例えは此處に一人の未開人が眠つてゐる。而してその間に遙に遠方に往来したり、嬉しいこと悲しいことに遭遇したり、未知既知の人々と交歎したりする。而も目覚めて見れば元の場所に元のままの姿で身を横たえている。或る他の未開人は、黄昏の淋しい場所を独り歩いてゐると、遠方に居る筈の友人が、思い懸けなくその姿を目前に現わし、また直ちに姿を消した。彼等はかかる不可思議を経験して、人間のうちには肉体より独立せる生命あるもの即ち靈魂が住み、肉体を抜け出でて色々のことをすると考えるというのである。

この臆測の当否はとにかくとして、未開人が靈魂の存在を信じてゐることは事実である。もとより彼等には未だ精神的存在といふ觀念がないから、靈魂と云つても決して無形のものではない。そは殆ど目には見えぬ朦朧たるものではあるが、なお一種の形體を具えたる存在者である。未開人の或る者は、心臓の鼓動を以

宗教の進化

て、靈魂が五体に血液を通わせるために、小さい槌で叩いているのだと考へる。或る者は差恥や憤怒の場合に頬が紅潮するのは、靈魂が頬面上つて来るからだと考へる。たましいという言葉が既に表現している如く、日本の上代人は、靈魂を青い火の玉の如きものと考えていた。グリーンランドの土人は、靈魂は骨なく肉なく神經なき柔軟なるもので、これを捉えんとするも手応えなきものと考えてゐる。死が襲い来れば人間の肉体は壊れて了う。されど靈魂は臨終の息と共に死の唇から脱け出で、幻の影の如き自身の存在を続けて往く。而して肉体を離れたる靈魂は、夢の場合にも知られる如く、不可思議なる神祕の力を具えている。それは電光の如く瞬時に千里を往復し、肉体に宿つていた時には不可能なる仕事を、何の苦もなくやり遂げ、如何に活動しても疲れることを知らない。それ故にポリネシアの土人等は、靈魂の活動を自由にして思う存分その敵を悩ますため、自殺することもある。コンゴーの一部に住む黒人の間には、その靈魂の加護を得るために、戦争の首途に母親を殺すことさえ行われている。

三

死靈と相並んで未開人は自然現象及び自然物素を崇拜する。彼等の単純なる意識には、自我と自我を囲む自然との間に、殆ど何等の差別をも認められない。彼等にとりて自然は皆な生きたる自然である。総ては彼等と同様なる意志と感情とを具えて活動する生きものである。花笑い鳥歌うといふのは、吾等に於ては「詩歌」であるが、彼等にありては「事實」である。フィンランドでは、呼子鳥の啼き初めるころから、草木は萌え花は開いて、全地に春が訪れる。それ故に彼等は呼子鳥を以て、地に栄光をもたらす不可思議なる鳥とする。ボヘミヤに住むスラヴ土人は、恰も人間に物言ふ如く、樹木に向つて色々なことを言う。もし「芽を出せ、芽を出せ、出さねば只は置かぬぞ」と言い聞かせて、なおその樹が芽を出さなければ、皮をはがれ

I 世界宗教思想史

るか枝を折られるかせねばならぬ。獸類は尚更人間の言葉を解する。カムチャヤ人の意見によれば、呼んでも犬が返事をせぬのは高慢だからである。黒人の解釈によれば、驢馬が物言わぬのは怠けものだからである。アラビアの土人のうちには馬もコランを読み得ると堅く信じている者がある。

泉も河も皆な生きている。かつて一英国人がアフリカを旅行中に、舟でナイジャーフレア川を下れる時、水平線の彼方に俄然一団の黒雲が現れた。舟を漕いでいた黒人が、遽しくその英國人の前に脆き、今まで白人を見たことなかつた河が見馴れぬ姿を見て怒り出したから、急ぎ舟底に身を隠してくれと嘆願したとのことである。タンガニイカ湖畔の黒人は、石が結婚して子を生むと信じている。中央アメリカの土人の中には、石の子孫と信じているものがある。古代のインド人は火を生物と考え、その生るや白く、その長ずるや紅しと言つてゐる。風は草木を折り、湿土を乾かし、雨をもたらす力あるもの、月は暗夜を照らすもの、星辰は人間に方角を知らせるもの、太陽は光明と温暖とを与えるものであつた。かくの如くにして彼等は、一切のものに自己と同じ生命を賦与した。

一切を生物と考える未開人が、自然を崇拜するに至れる心理的過程は、容易にこれを理解し得る。低度の文化段階にあればあるほど、自然は人間に對して偉大なる力を以て臨む。太陽は彼等の暖炉であり、岩は彼等の家であり、泉は彼等の井戸であり、月は彼等の灯明である。一方にはかくの如き恩恵を垂れるものあるに対し、他方には雷電や旱魃の如き、恐ろしき力を以て彼等に臨む者もある。生きんがために彼等は、是非ともこれ等の自然の力を藉りなければならぬ。生きんがために彼等は自然の恩恵を請い、また自然の憤怒を和らげなければならぬ。かくて彼等にとりて不可思議なる自然、彼等よりも偉大なる力ありと信ぜられたる自然が、ことごとく神として崇められるに至つた。いまや嵐の咆哮、電雷の怒号、波濤の叫喚は、直ちに神の声となつた。かくして若干の日用品や、日常使い馴れし勝手道具の類を除けば、殆ど総てのものが宗教的

宗教の進化

崇拜の対象となつた。これが即ち自然崇拜と呼ばれるところのものである。

レヴィィーユはこの自然崇拜を、大自然崇拜及び小自然崇拜の二つに分ち、日月星辰等の天体や、降雨電雷等に対する崇拜を前者に、木石泉流ないし動物等の崇拜を後者に属せしめている。前者はその性質に於て普遍的であるが、後者は概ね地方的・局部的色彩を帶び、その発達の経路も自ら異つてゐる故に、レヴィィーユの分類は決して無意義のものでない。

さて死靈崇拜及び自然崇拜にありては、崇拜の対象が何等かの点に於て人間よりも立優れるものである。人々が太陽や靈魂や動物を挙するのは、その物自身のうちに、人間をして慕わしめ、敬わしめ、怖れしめる性質が具わつてゐるからである。然るに多くの未開種族殊に南アフリカの黒人間に、前両者とは著しくその趣を異なる呪物崇拜と呼ばれる宗教が行なわれてゐる。呪物崇拜とは、それ自身では全く無価値なる物体を、恰も人体に人心の宿るが如く、一個の精靈が宿つてゐるという信仰の下に、これを崇拜する宗教である。従つて崇拜の対象は、石塊・木片を初め、犬の骨たると毛髪たるとを問わない。如何なる物にもせよ、その中に有力なる精靈が宿つてゐると考えられさえすれば、直ちに彼等の崇拜の対象となる。而して彼等は、かくの如き呪物を、或いは小屋の中に飾り、或いはこれを肌身につけ、その中に宿る精靈の冥加を祈つてゐる。もし一人の未開人が、自己の守護神として或る呪物を信仰してから、彼の生活が幸福になつた場合は、その呪物に対する信仰は益々篤くなる。しかしながらもしこれがために何等の利益ももたらされなかつた場合、もしくは却つてその生活が不幸になつた場合は、彼は直ちにその呪物を棄てて、新に他の呪物を選ぶのである。それ故に多くの未開人は、皆な数々の呪物を持持し、第一の呪物には大猿を祈り、第二には良き妻を祈り、第三には戦勝を祈り、第四第五にもそれぞれ御利益を願つてゐる。

呪物崇拜は、一切のものに精靈が宿るという信仰と、因果関係の認識錯誤とを根柢とする宗教である。高

I 世界宗教思想史

処にある石が突然落下して、崖下を歩みつた場合に、彼はこの事を以て自然力の作用とはせず、その石に宿れる精霊の仕業と考える。或いは折れ釘で足を踏み通した未開人は、この事を以て己れの不注意から来た災難とはせず釘の中に悪霊が宿っているためだと解釈する。かつて南アフリカの一黒人が、難破船の錨を拾い、これを自分の小屋に持ち帰つてから間もなく死んだ。その後近所の黒人は、この錨を呪物として篤く信仰した。かくの如く未開人の偶然なる生活経験が、最も些末なる物をも宗教的崇拜の対象たらしめ、これに宿れる精霊を己がものたらしめんとの欲求から、これと交通する儀式を営ましめるようになるのである。

また或る未開種族に於ては、人工呪物が主として崇拜の対象となつてゐる。例えば古代のカルバル人は、麦藁・布片・木片などで呪物を作り、これを崇拜していた。それは一見偶像崇拜と似通つてゐるけれど、両者は厳格に区別されねばならぬ。けだし呪物崇拜は、決して定まる形態の有無を問わない。人工呪物の場合でも、その形態及び形態の表現する意味が重要視されるのではなく、唯だ未開人が勝手に或る形態のものを造り上げ、然る後に有力なる精霊の來りてこれに宿らんことを求め、そのためには一定の儀式を行うのである。呪物崇拜は最も低宗教形態であり、その崇拜にも利己的打算が最も著しく現われている。

四

天地、日月、風雨、電雷などの大なる自然、泉流・草木・飛禽・走獸などの小なる自然、その物自身は何等の価値がないけれど、有力なる精霊を宿していると信ぜられた呪物、及び父祖の靈魂、これ等のものが原始宗教に於ける崇拜の対象であった。神々は人間と同じ感情を以て感じ、同じ動機を以て動き、同じ理性を以て判断すると考えていた原始の人類は、神々にとりて最も必要と考えたもの、又は最も神々を歎ばすに足

宗教の進化

ると考えたものを神前に献げ、これによつて自分たちに最も必要なものを与えられんことを願つていた。それ故に最も普く行われた神前の供物は、食物及び酒であつた。彼等は美酒佳肴を神々に献げて、或いは「吾等に豊作を与え給え」と祈り、或いは「吾等に大漁を与え給え」と祈る。而して人間の数限りなき欲求に応じてこれ等の欲求を満足せしめる力ありと信ぜられた多数の神々があつた。而して彼等の生活経験が、常に新しき神を見出して、その生活内容を豊かならしめんとした。かくて此処では一の理由の下に或る神が現れ、彼処では他の欲求の下に他の神が現れた。その新しき神も時を経て忘れられ、古き神も何等かの機会に想い起ざるれば再び崇拜の対象となる。過去もなく、未来もなく、唯だ利那の現在に生きる彼等の生活が果敢なかりし如く、神々もまた果敢なきものであつた。而もかくの如くにして取り得るだけの栄養をせつせと攝取し往く間に、人間の宗教的生命は徐々なれども確実に成育して往つた。それに従いて信仰は醇化せられ、神々の性質も向上した。然らば混沌たる信仰から、如何にして更に高き宗教が生れたか。

単純なる原始の人類は、實に自然そのものを直ちに神として崇拜した。昭らかに見える太陽そのもの、月そのものが直ちに神の姿であり、雷霆そのもの、風声そのものが、直ちに神の声であつた。彼等は自然を生きたものと信じていたが、未だ精確にこれを人格者とは考へなかつた。原始人の生活が、恰も舵なき舟を太平洋に浮べて漂える如くなりしと相応じて、その宗教もまた偶然の出来事に支配され、人間の生活と共に限りなく変化を繰返すにすぎなかつた。かくの如き漠然たる宗教が、転じて多神教となり、ここにその進むべき方向を得るようになつたのは、神々がそれぞれ固有の名前を与えられてからのことである。即ち従前は單にお日様であったのが、或いは天照大神、或いはスウリヤ、或いはジュピテルの名前を以て呼ばれ、従前は単にお月様と言われていた神が、或いは月説命、或いはヴァルナ、或いはセレーネと呼ばれるようになつて、宗教は初めて人間の心に堅くその根を下ろしたのである。

I 世界宗教思想史

神々が定まれる名前を有するに及んで、その名前を基礎として人間の想像や推理が盛んに活動するようになった。神々は次第に明確に人格化されて、それぞれ独自の性格を有する者となつた。而して更に一步を進めて、本来神々の基礎たりし自然そのものは次第に忘れ去られ、自然的基礎と絶縁せる独自の性格と閱歴とを有する神格となつた。例えばギリシャのアポロは、もと太陽と光明とを神化せる自然神であったが、後に智慧、詩歌及び予言の神となり、遂には全くその自然的基礎を超越して、真善美の神、天啓の紹介者、文化の護持者となつた。インドのインドラは、初めは豪雨を神化せるものに過ぎなかつたが、後に武勇の神となり、更に転じて福德の神となつた。またイスラエル民族のエホヴァも、もと沙漠に起る暴風雨の神化であり、雷霆を声とし、疾風を息とし、電光を眼とし、雲霧に駕して大空を翔り、風の翼にのりて時に大地に降り、海陸を震撼する怖るべき自然神であつた。而して後にエホヴァが、全然かかる自然的根拠と絶縁することとは、旧約を読みたる人の熟知するところである。

かくの如く神々が自然物素及び自然現象を離れ、独自の神格を具え、一定の能力ある者となるに及んで、漠然たる自然崇拜は、ここに謂わゆる多神教となる。多神教は決して何處でも同一形態を以て行われるのではなく、その間に種々なる信仰を容れることが出来る。或いは一切の神々を平等に信仰して、感情と聯想との導くまにまに、或る時は一の神、或る時は他の神を挙む純然たる多神教もある。又は多神の存在を認めていても、実際に崇拜されるのは、そのうちの一神に限られる場合もある。例えば古代イスラエル人は、エホヴァ以前に多くの神々があることを信じてゐるけれど、厳格にエホヴァだけを崇拜の対象とした。一たび旧約を開けば、或いは「多くの神あり、されどエホヴァに勝るものなし」と言い、或いは「多くの神のうち、吾等はただ汝のみを挙す」という信仰の表白を、隨處に見出しが出来る。宗教学者は、かかる多神教を单一神教と呼んでいる。次にはまた多くの神々を崇拜しても、或る時は一個の神格、或る時は他の神格が、

宗教の進化

一切の自余の諸神を超える最高神として信仰されることがある。その絶好の例証はインドの吠陀宗教で、或る時はアグニが、或る時はインドラが、或る時はヴェルナが、また或る時はミトラが至高神とされていた。かくの如き多神教を、宗教学者は交替神教と呼ぶ。

大自然崇拜は、事実に於て偉大なる力を崇拜する。而してその形式に於ても仰いでこれを拝するものであり、人間の精神をして高きに向わしめる力があった。そは本質に於て普遍的なものである。天は何処でも天であり、日月は何処に往っても日月である。人々は隨處にこれを拝し、これと交わることが出来る。然るに山川・草木・禽獸などを対象とする小自然崇拜は、その性質に於て地方的であり、局部的である。従つてその発達の傾向も、また自ら自然崇拜のそれと異らざるを得ない。人々は山や河を自分と共に何処へでも持つて往くことは出来ない。動物は唯だその動物が棲息する地方に於てのみ崇拜の対象となり得るし、泉流や樹木も同様である。かくの如き地方色を帶びたる小自然崇拜も太古に於て世界の到る処に於て行われていた。地方々々の小部落には、その部落だけに限られた小自然崇拜があり、それぞれ独自の地方的崇拜が行われていた。

これ等の小自然崇拜も、大自然崇拜の場合と同じく、初めは自然そのものが直ちに神であったが、後には次第に自然的基礎と絶縁せる人格神となつた。例えば古代インド人は、サラスヴァティー即ち弁天河を直ちに神として崇拜していたが、後にはその河の神靈とせられ、更に転じて才智・財宝・幸福の女神となつた。弁天は日本に於て七福神の一に加えられているが、その社の常に水辺に建てられるのは、もと水靈なりしが故である。その他井泉や樹木の場合も、初めは井泉・樹木をそのままに神としていたのが、後には泉の精や樹の靈を崇拜の対象とするようになった。

小自然崇拜のうち、特に注意すべきものは動物崇拜である。人間が動物を拝するのは、一面に於てはその

I 世界宗教思想史

知慧又は力に対する畏敬からである。例えば虎はその怖るべき力により、鹿はその脚の疾きにより、狐はその測るべからざる知慧によりて、人間の神となつた。然るに動物は、他面に於て人間の生命を養う恩惠者としても神とされた。例えば牛を常食とし、或いは羊を常食とし、或いは兔を常食とする原始人は、後に叙上の動物以外に諸多の食物を得るようになつてから、原始の生活に最も必要なりしこれ等の動物を神として崇拜するに至つた。而して生命を養うという思想が、一転して生命の本原という信仰となり、ここに或る種の動物を以て部族の始祖なりとする信仰が生れた。この宗教形態はトーテム崇拜と呼ばれ、祖先として崇拜される動物をトーテムと呼ぶのである。トーテム崇拜は北米イングランド人の間に最も顕著に行われたが、総ての民族が一度はこの崇拜を有していた時期があると想われる。そは多くの場合に於て有史以前にその姿を隠して了つたけれど、神が動物の姿をとりて人間と結婚する神婚神話となりて民間信仰の中に残存している。例えばギリシャ神話に最高位を占めるゼウスは、常に動物の姿をとりて女を得ている。即ち嫡妻ヘラを得る時は杜鵑、オイローパを得る時は牛、レダを得る時は白鳥となつてゐる。支那及び日本に弘く行われてゐる羽衣説話も、また恐らくトーテム崇拜の所産であらう。

五

小自然崇拜の特色は、既に述べたる如く、その地方的なることに在る。神木の崇拜は、その樹の生えてゐる処で行わねばならぬ。井泉に祈るには、その井泉のほとりで祈らねばならぬ。神々は一定の住処を有するが故に、任意にこれを動かすことは出来ない。而して一定の場処に住む神々は、その周囲の住民と特別なる親密の関係を生ずる。この信仰と祖先崇拜とが相結び、同一の神々を中心とする宗教的団体が生れ、それが同一の血を共有する一族であるという信仰を生み、ここに全然地方的なる且つ部族的なる宗教が生れる。

宗教の進化

純然たる部族生活は、常に同一血族という信仰によつて團結されている。もとより實際は大なる部族の間にことごとく同一血液が流れているのではなく、また必ずしも同一家族から分れたのでもない。一つの部族は、多くの場合は異なる諸家族の結合であるけれど、それにも拘らず血統關係ということが、部族的生活の動かすべからざる信仰となつてゐる。而して人間が一旦部族的生活を営むようになれば、宗教は最早一個人の私事たることを得ない。その崇拜の対象も、偶然の出来事や個人隨事の發意を根拠とするものでなく、更に根柢あり、確實性あり、更に永続的なものが選び出されねばならぬ。部族生活に於ても、精靈や呪物に対する信仰、及び呪物崇拜の墮落と見るべき魔術と禁厭、並びに一家族内の祖先崇拜は、依然として行われていたが、かくの如き個人的信仰よりも、共同の信仰が次第に勢力を得て來た。多くの自然神は、その自然的基礎と絶縁して、部族の守護神となつた。かくてそれぞれの部族は、部族全体の祖先として、血によつて部族の成員と相結ばれたる部族神即ち氏神を有する様になつた。部族神と部族との関係は、文字通り父と子との関係で、部族生活と部族神とは、互に離べからざるものとなつた。部族神は当然その部族の守護者とならねばならぬ。何となれば部族を守護することは、神々自身を保護することであり、部族の滅亡は神々自身の滅亡に外ならぬ故である。かくて部族宗教は、大自然崇拜より來れる多神教の場合よりも、神人の関係を遙かに密接ならしめ、また社会生活との交渉をも遙に緊密ならしめる。

宗教が人間の共同生活の基礎となり、共同団体の関心事となるに及んで、そは個人の勝手なる要求や空想の域を脱して、普遍的なる信仰に向つて進み始めた。宗教生活は最早エゴイズムの舞台たることを許されなくなる。もとより利己的・打算的なる要素は依然として残存していても、これと同時に神のためには何ものとも犠牲にせんとする献身的精神が、鮮かに現れ始めた。彼等はその信する神の前に、彼等の最も貴重なるものを欣んで献げた。彼等は生命そのものを献げた。愛する小供を献げた。最も神聖視せる婦人の節操をも

I 世界宗教思想史

献げた。これ等のうち人身御供は比較的早くその跡を絶つたけれど、節操犠牲は多少異なる相に於て後世まで行われた。予の郷里の一村落では、明治年間の中期まで、下の如き風習が行われていた。即ち一年一度のその村の鎮守の祭礼の夜に限り、村中の未婚の男女が自由なる交際を許され、娘を有する親は、これを村の男子に提供する義務があつた。こは疑いもなく当初は鎮守の神に処女を献げたのが後代に至りて原始の意味を失い、面白からぬ風習となれるものに外ならない。処女性は多くの未開人によつて甚しく神性視された。古代ローマの法律では、如何なる大罪を犯しても、処女を死刑に処することが出来なかつた。さればもし処女の死刑を必要とする場合は、刑の執行者が先ずその女子の処女性を破り、然る後にこれを刑罰に付した。人身御供や節操犠牲は決して善きことではない。而もこの怖るべき供犠のうちに、人間の神に対する絶対的帰依の誠が動いている。而して宗教は部族宗教に於て、明かに一段階を登高した。

宗教は今や最も重要な公共の神事となつた。異常の出来事に会う毎に、人々はこれを神に訴え、神に図ることなくしては、決して共同生活の重要事件を処理し得ない。かくの如き場合に、神に向つて事件を報告し、その加護を求めることが、部族の首長の最も重要な役目であつた。神は部族の先祖であり主君でもある。神の利害は部族の利害であり、部族の利害は神の利害である。従つて宗教は部族全体の関心事であり、個人と神との関係は間接のものとされる。それ故にこの段階に於ては、吾等の意味する如き信仰も不信仰もない。部族の神に事えることは、部族の一員たる個人の義務である。もしこれを拒むならば、その人は死を以て罰せられるか、又は部族より放逐されるだけである。部族宗教に於ては、個人の要求願望は殆ど顧られない。そは人間の個人としての存在は殆ど認められていなかつたからである。唯だ部族そのものは、全体として常に神との間に親愛なる関係を持続し、且つ神を以て堅く部族の守護者と信じたるが故に、この時期の宗教は、一般に確信と歓喜の色を帶びている。その崇拜は概ね盛大なる饗宴に於て行われ、人々は神々と共に

宗教の進化

に飲食し、神々と共に楽しんだ。舞踏や演劇は神々を欣ばせんとする宗教的動機から生れ、初期の宗教に於ては、高歌歎舞が常に饗宴に伴つていた。

六

繰返して述べたる如く、各人の脉管には祖先の神の尊き血が通っているという信仰の下に、多くの家族が相集まつて部族的生活を営むようになつた。部族的生活は、一面に於ては人間の共同生活に最も必要な献身犠牲の精神を鍛錬する好個の道場であつた。刹那々々の個人的興味に支配され、食欲と性欲とを最大の関心事としていた人間は今やその属する部族のために、自我の一切を獻げるようになった。人間は部族全体の利害のために、如何なる犠牲をも欣んで払つた。もし部族の一人が他部族の者のために辱しめられた場合は、全部族を挙げてその一人のために復仇の剣を執らねばならぬという不文の鉄則が出来上つたほど、彼等の団結は強固となつた。しかしながらかくの如き部族生活は、他面に於ては人間精神の痛ましき桎梏でもあつた。神は部族の父でもあるから、部族の風習は神が定めた神聖なるものとなり、人間の精神生活に於ける最後の権威者となつた。部族という高い墻壁が、人間の心裡に植付けられた貴き苗に、美しき花を開かしむべき日光を遮つた。人々は自己の部族に神ある如く、他の部族にも神あることを知つていた。而も彼等は自己の神だけが善神で、他部族の神々は悪神であると信じていた。従つて部族とは、常に仇敵として対峙していた。彼等は血には血を以て報いよという鉄則を堅く守りて一方の部族が滅亡し去るまで戦い続けた。而してこの不斷の争闘は、彼等をして部族的生活以上に登高向上せしむべき一切の門戸を鎖して了つた。かくして彼等の道徳と宗教とは、一方に一の迷信と不道徳とに抵抗しながら、他方に於て常に他の迷信と不道徳とに陥りつつあつた。

I 世界宗教思想史

かくの如く激しき排他的性質を有せる諸部族が、彼等の間に築かれたる超え難き墙壁を打破して、国民的生活を営むようになったことは、眞に偉大なる人類の進歩であった。或いは避け難き必要に迫られ、或いは威力絶大なる酋長に強制されて、一群の部族が一個共通の政府を樹て、各自の部族的伝説や風習をなお維持しながらも、部族より一層大なる国家という共同团体の一員として行動するに至りしことによつて、ここに初めて眞にその名に値する人類の文化がその産声をあげたのである。

いまや部族的生活に於ける團結の唯一の紳なりし血統の同一という信仰は消え去り、血に血を以て報いる復仇や族鬭は次第にその跡を絶ち、國家の意志の発現たる法律が、伝説や風習に代つて国民の行為を規定するようになった。分業が行われ始めて、国民の間に士農工商の別を生じた。戦争は依然として共同生活の最も重大なる仕事であつたけれどこれと伴いて平和の事業も大切なものとなつて來た。時間を測定する方法が案出された。書写の術が發達し始めた。過去の出来事や祖先の偉業が、主として詩歌に謡われながら、父祖から子孫へと伝えられた。国民は同一の歴史の下に生き、永くその歴史を心に留め、少くもその梗概を記憶するようになった。かくして従前の単純なる自然的関係の代りに、人格的・道徳的な歴史的関係が、人類の共同生活のうちに入つて來た。而してこの新しき共同生活に於て人間の宗教的一面も、また当然その面目を改めねばならなかつた。

すでに述べたる如く、国民的生活は多くの部族の結合によつて發達せるものである。而して幾多の部族が相結んで一国を成せる後でも、個々の部族は決して直ちに従来の部族神を忘れ去りはしなかつた。従つて政治的には国民的生活の統一がありながら、宗教的には多様なる神々が雜然として存在していた。人間はかくの如き宗教的混沌の間に停徊することを好まず、何等かの方法によつて、雜然たる神々を統一せんとした。而して統一の最初の結果は「神國」の建設であつた。人々は、人間の世界に行われる秩序を、そのままに

宗教の進化

神々の世界にも適用して、神々の間に親子兄弟の關係を附し、貴賤上下の區別を立て、終に一個の最高神又は数個の偉大なる神々を奉戴する神国を形成した。吾等はかかる神國の好き例証を、バビロン・エジプト・ギリシャ・ペルシャ・インド及びゲルマン人の宗教に於て見ることが出来る。而してかくの如き神國に於て最も高き地位を与えられるのは、言うまでもなく最も勢力ある部族の神、又は最も勢力ある都市の神であった。例えばエジプトに於てはメンフィス・ヘリオポリス・テーベンの諸市が順々に盛大を極めたので、同じ順序でそれぞれの都市の地方神が、神々の國に霸を称えて來た。バビロンに於ては、バビロンの勃興と共にその部族神たりしマルドウクが最大なる神となり、國王ナボニドスは帝国内に於て崇拜せらるる總ての神々を、マルドウクを首長とする一神國に綜合せんとした。かくの如くにして人々はその宗教の中心点を得た。

七

星霜を経るに従い、神々の原始の姿が、次第に人間の記憶から隠れた。初めは個々の部族又は個々の都市の崇拜の対象たりし神々も、次第に原始の意味を忘れ去られた。而してそのためには宗教は更に新しき変化を受けた。即ち神々の地方的色彩が消え去るに従い、多くの神々は国民生活の各方面を支配する神となつた。

一般の原則としては、征服種族の神々が軍隊や戦争の神となり、被征服種族の神々は農夫や牧者の神となる。かくの如くにして戦争の神、田野の神、食物の神、航海の神、芸術の神などの如き、人間生活の諸多の方面に、それぞれの守護神が出来た。

神々のかかる分業の極端なる例証は、これを古代ローマ人の宗教に於て見ることが出来る。例えばサトウルスは播種を司り、テルミヌスが国境を守る神である如きは敢えて異とするに足らぬけれど、後には一々の事物、一々の行為が、ことごとく一定の守護神を有するようになつた。小児が搖籃の中にいる間はクニヤと

I 世界宗教思想史

いう守護神がいる。立つ時にはスタティナ、食う時にはエドウサ、初めて物言う時はロクティウス、母の前に出る時はアデオーナ、母の前を去る時はアベオーナと云うように、唯だ一人の小児のためにさえ、四十三の守護神が教えられている。同様に五穀が春に播かれて秋に収められるまでには、セイヤ・セゲティヤ・トウティリナ・ノドトウスなどの神々が、それぞれの季節に於て穀物を守護している。これほど甚だしくはないにしても、総てこの段階に在る宗教に於ては、人間の社会的生活に於ける分業に応じて、神々もまた人生の各方面を分担して守護することとなつた。

神々の分業に次で最も注意すべき現象は、宗教に於ける神像の出現である。人々はその信仰を生々とさせるために夙くより見えざる神を、見える姿にて現わそうと努めていた。神々の性格が漠然たりし時代には、天然のままの樹や石で神を表現するに足りたが、神々が次第に明確なる性格を与えられるに従い、天然の石や樹にも、目鼻がつき手足が出て、漸次神像の完成を見るようになる。従つて神像は決して当初から人間の姿を取つてゐるのではない。最も初期に於ては、神々は多く動物の姿によつて表現されている。例えばカナン人はバール神の姿を牝牛で表わし、バビロン人はその神ダゴンに怪魚の姿を与えていた。而してその次には半神半獸の神像が多く行われた。その最好の例証はエジプト人の宗教である。即ち女神ハトールは牝牛の角を有し、男神セブは鷺鳥の頭を有し、ホルスは鷹頭、バストは猫頭、オシリスは牛頭、クヌム及びアモンは羊頭を有している。或いはまだバビロンの宗教に於て見る如く、神々は当初その姿をとりて表現された動物に騎り、又はこれに車を輶かせているものもある。而してかくの如き神相獸身の段階を経て、初めて神々が人間の姿をとりて表現されるようになった。而して何人も熟知する如く、ギリシャの宗教に於てそれが至高至醇の発達を遂げている。ギリシャ人はその秀でたる芸術的才能を以て、輝き渡る美しさと渴仰を禁ぜざらしめる貴さをえたる人間の姿を以て、その信仰する神々の姿を表現した。

宗教の進化

神像はキリスト教及び回教によって激しく攻撃されているために、往々にして不当なる誤解を受けている。されどエレミヤ・イザヤ及びボーロ等の人々が、残酷なる非難を神像崇拜に加えたのは、彼等が当時の低き宗教に対して自己の信仰を守らねばならぬ境遇にありしたため、公平なる歴史的判断を下している違なかりしによる。実際の事実として、宗教史上に於ける神像の意義は、言い尽し難きほど大である。名もなく形もなく、知ることも見ることも得ず、従つて一定の性格もなき漠然たる精霊が、生命あり形相あり人格ある神々となる際に、最も多くその発展に貢献したのは實に神像そのものであつた。

神像の出現は、当然の結果として神殿の発生を伴つた。長い間、神々の崇拜は神殿と無関係であつた。人々は大空の下で神を崇めた。或いはまた好んで山上でこれを拝した。然るに神像を造りてこれを拝するに及んで、初めて神殿の必要が起つた。もと神殿も当初は単に神像を安置する小さき建物であつたが、後にはこれを中心として次第に他の部分が附加されて來た。神殿の出現が如何に偉大なる貢献を人類の文化発展の上になしたかは、更めて絮説するまでもない。古代インドの婆羅門^{婆羅門}の必修学問の一なりし巧明は、實に神殿の造営に必要な知識を得るための学問であり、そのためにはインドの建築術及び数学は、驚嘆すべき發達を遂げた。

最後に最も注意すべきことは、神像及び神殿を中心として、聖職者即ち司祭が現れたことである。隨時隨處に神を拝せる原始宗教に於ては、もとより司祭の必要がない。而も今や神像を守り、これを潔め、これを祀り、礼拝の秩序を保ち、堂宇の保存に関心せねばならぬようになって、初めて宗教的行事を専門とする司祭が必要になって來た。かくて一定の素養あり、多年の修練によつて得たる技能を有する人々が、聖職者として国民的生活に於ける宗教的一面を分担することとなつた。これ等の人々は、後代に至りて強固なる一階級に發達し、神々と國民との仲介者として、大なる特權を確立するに至つた。

I 世界宗教思想史

司祭制度の発達と共に、儀式が宗教的生活に於て次第に重要な地位を占め来り、遂にはその中心たるに至つた。かくて宗教的行為とは正しく儀礼を行うこと、敬虔とは所定の規則に従つて神々を祭ることを意味するようになった。例えは宗教という言葉は、英・仏・独語の Religion の訳語で、ラテン語の Religio から来ている。而して Religio は、綿密に事を行うという意味の動詞 relegere から来たのである。それ故にシセロは「総て神々の儀式に関する事を宗教的事柄といふ」と言つてゐる。单りローマ人のみならず、宗教進化のこの段階に於て、他の国民もまた宗教の中心は儀式にあると考へてゐた。支那に於ても初めは唯だ社・類・野・秩などの如き種々の祭式の名称ありて、これを概括して宗教に相当する言葉なく、礼記に至りて初めて礼詞又は祭法という概括的名称が出来た。而して礼詞及び祭法が、ラテン語の Religio と同様の概念を現していることは言うまでもない。日本に於ても、ローマ人や支那人のそれと同一の概念を表わせるまつりごと又はかみわざという言葉を用いてゐる。インドに於ても、Rita とは儀式を正当に行う意味である。またドイツ語の Gottesdienst 即ち神事は、今や宗教的行為の一部を現わすために使われてゐるが、初めはこれを宗教全体の意味に用いていた。オランダに於ては現にこれを宗教という意味に用いてゐる。西洋文明が初めてオランダ語を通して日本に伝えられた時、最初の翻訳者はこれを祭祀又は宗祀と訳し、その後更に宗教と改めて、現に使用する如き広き意味を与へられたのである。

但し宗教のこの段階に於ても、その主觀的方面が決して全然無視されたのではない。シセロが既に「宗教は儀式よりも貴し」と言つて居る如く、人間は心を淨めて謹んで行うにあらずば、儀式の本旨に適わぬことを知つてゐた。それ故に支那に於ては、祭法を以て「虔みて」行うべきものとし、日本に於てはかみわざを行は「いむ」なり「いつきまつる」なりとして、司祭階級に忌部又は齋部という名称を与えている。唯だ宗教の中心が儀式の上に在りとの信仰が、儼然として存在していたために、儀式の上の落度は最も厳しく所

宗教の進化

罰せられ、恐るべき神の憤怒も、正しく行われる儀式によつて和らげ得ると考えられていた。かくて諸神は、儀式を知れる司祭階級の掌裡に帰することとなつた。

精神的生活の専門家たる司祭等によつて、人類の生活が物心両面に於て著しき發展を遂げさせられたことは、何人も拒み得ぬ事実である。彼等は實に文化の先駆者でもあり、護持者でもあつた。唯だ国民生活に於ける彼等の地位と特權とが確立せられるに及んで、すべての特權階級に免れ難き誘惑が、彼等をも腐敗堕落させた。彼等は神々の前には、万民が平等であることを忘れて、自分等のみが宗教的生活に於ける優越者であると考えるようになつた。神人交通の道が、必ず司祭の儀式に待たねばならぬこととなつて、司祭と俗人と之間に截然たる区別が立てられた。彼等は「神々は神秘を好み給う」と唱えて、些細なる祭祀をも秘密に付し、神々をして益々俗人の近づき難きものたらしめた。それ故に彼等の間に高尚なる觀念や思想が発達しても、多数の国民は全くこれと没交渉であった。

それのみならず司祭の宗教そのものも、また墮落を免れなかつた。現実の生活に即せざる思索や信仰は、たといその形式に於て如何に高貴に見えようとも、真個に生命の泉を豊潤ならしめることは出来ない。それ等の高貴なる觀念や信仰は、当初これを把握せる司祭にとりては、激刺たる生命の力であつたと相違ないが、これを聖伝として繼承せる後代の司祭たちは、その出世間的なる閑寂生活の間に、この貴き信仰を死滅させた。かくて彼等の宗教は、一面には外部の儀礼を繁雜ならしめて、国民生活に無用の束縛を与えるか、又は他面に於て主觀的なる神秘主義に墮し、病的恬淡か又は病的興奮の享樂を主とする傾向を生じた。而して国民生活が退黽的なりし場合に、この傾向は特に著しかつた。エジプト、後代ペルシャ、後代ユダヤ、古代インドの宗教史は、司祭制度が宗教生活に於ける一切のものを国民より奪い去り、従つて一切の激刺たる生命を国民より取り去つたことを示している。

I 世界宗教思想史

かくて人間の精神的生活は、更に一步を進めねばならぬことになった。生命の流れは、新たなる路を切り開いて流れねばならなかつた。而してこの大なる使命を果すために、西紀前第六世紀より第五世紀に亘り、俄然として一群の覚者が東西殆ど時を同じくして、歴史の舞台にその雄々しき姿を現わした。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

東西に於ける覺者の出現

—

西紀前第六世紀及び第五世紀は、世界史に於て真に特異なる而して貴重なる一時期を劃して居る。古代文化の中心なりし支那・インド・ペルシャ・イスラエル及びギリシャの国々に、最も光耀ある偉大なる人格が約百年の間に期せずして東西に出現し、人間の精神的生活に至大の感化を与えた。従来の人類の歴史は、謂わば「群衆」の歴史であったが、この時に出現せる偉人によつて、初めて「人格」の歴史となつた。宗教もまたこれまで神と家族、神と部族、神と国民との関係であったが、この時に至りて神と「人間」との関係となり、従つて宗教は国境を超越せる世界的即ち普遍的のものとなり始めた。これまで人間の全生活は、民族の慣習に隸属せしめられ、自發的にして独立なる精神の發動を妨げられて來た。然るに今やこれ等の覺者は、風俗・習慣・儀式・伝承等の外面的束縛から人間の精神を解放し、最も神を歎ばすものは、供犠にも儀式にも非ず、唯だ善なる行為と誠実なる言語と、無垢なる意志であると教えた。

さて覺者のうち、年代に於て最も早く現れたのは、ペルシャのツアラトウストラである。彼はペルシャ人に向つて善神と惡神とを明かに區別すべきこと、善神を拝して惡神を斥くべきこと、人々は自己の恐怖心よ

I 世界宗教思想史

り、災害を免れるために悪神を拝してならぬことを教えた。この説教は、如何なる神をも等しくこれを崇拜すべしと教えていた従来のペルシャ宗教の多神的信仰に対する破天荒の打撃である。或る学者はツアラトウストラが、悪神の存在を認め、善惡二神の戦闘を説いたことを以て、彼の宗教の二元的性質を非難する。しかしながら実際に於て悪神に対する如何なる儀式も定められなかつたこと、善惡二神の戦闘に於て、最後の勝利が善神に帰することから推して考へれば、彼の信仰の二元的性質は、恰もキリスト教に於て悪魔の存在を許容するが如きものである。そは中世のキリスト教が悪魔の信仰によつて、多少純一なる一神教の面目を傷そこなえることありし如く、後代ペルシャ人をして深刻に善惡二神を対立する二元教に陥らしめた原因とはなつたけれど、それは決してツアラトウストラの本意でない。彼に於て悪神は畢竟征服されるために存在するだけで、実際に於て人間の生活を支配する者は、光明と生命と秩序との本意たる普耀一切の神アフラマツダのみであつた。彼はまた国民的信仰の対象たりし神々を、一々否定はしなかつた。彼の信仰はアーリヤ民族の信仰に共通なる汎神論的色彩を帯びるが故に、それ等の神々を以て、恰も光明の本体たるアフラマツダより発する光線の如きものと考えていた。彼は一切の人間が、ことごとくこれ等の善神を助けて、その神聖なる戦いに参与し得る光榮と尊嚴とを有することを力説し、正しくして善なる人々は、取りも直さず神の本質をその心に体得せるものなることを教え、一挙にしてペルシャ宗教に纏綿せる国民的制約を打破し、一切處に於て一切衆生に通ずる普遍的宗教を宣伝した。

次にインドのヤージュナヴァルキヤの宗教を見よ。温和清明の沃野に住し、仰いでは天象を拝し、俯しては河川の恩沢を讃えていた快活潤達なる吠陀の自然教が、民族の南下と共に、繁縟なる儀礼と陰鬱なる瞑想との司祭的宗教となるに及んで、一方には多様なる哲学的思索の氣運を促したけれど、他方には宗教を形式化し、万般の社会的事物を僧侶の支配に委ね、遂に宗教的精神の沈滯と、社会人心の銷磨とを招くよう

東西に於ける覺者の出現

なつた。然るにこの間に在りて一群の真摯なる求道者が、厳格なる修行と自由なる思索とによつて、眞実の宗教を求めつゝあつた。ウパニシヤッドは、これ等の自由思想家によつて擄得せられたる示教の記録で、彼等を代表するものが取りも直さずヤージュナヴァルキヤである。

彼は一方に於て婆羅門族の形式的信仰を打破し、彼等の貪欲と偽善とを攻撃し、厭うべき迷信の排斥に力を尽すと同時に、他方に於てはインドの正統思想なる汎神論を闡明し、神々に対する從来の神話的解釈を、哲學的説明に進展せしめたる点に於て、正に偉大なる婆羅門教の改革者であつた。

彼によれば、宇宙は絶対の一如ブラハマン即ち「梵」の顯現である。梵のみが實在で、在るものは梵のみである。而して梵は外に求めて得らるべきものでない。そは吾等の存在の至深處に沈み往きて探らねばならぬ。人は無明に累わされて迷妄裡に彷徨しているけれど、知慧によりて「我即梵 Ahma Brahman asmi」の真理を得すれば、差別流転の世界を超えて、絶対の彼岸に到達し得る。「其處には日も月も星も輝かず、自己のみ独り輝き、一切はこれによりて輝く」。この常寂の「梵涅槃」こそ、ヤージュナヴァルキヤの最後の理想境であり、且つ一切衆生の懺悔の対象たるべきものとされた。

吾等はウパニシヤッドの宗教について、語るべきなお多くのものを有する。然るにウパニシヤッドの梵に就ての概念は、殆ど同時に支那に出現せる覺者老子の「道」の概念と驚くべき類似を有するが故に、この支那の大思想家の教説を述べながら、いま言い残したる点を若干補うであろう。

二

反省的ではあるけれど哲学的ではなく、思慮深くはあるけれどその思想は飽くまでも具体的なりし支那人の間に、一般の国民性とは著しく面目をする偉大なる人格が、西紀前第六世紀の中葉に、突如としてそ

I 世界宗教思想史

の龍の如き姿を現した。もと支那人の眼中には、人あり家あり国家あつたけれど、自然又は世界を思索の対象とすることはなかつた。不斷に彼等の腦中に徂徠せるものは、現實生活の事実であり、その問題とするところは、人生とは何ぞという如き純知的のものではなく、如何にして生くべきか、家及び國家の一員として如何にその身を愛すべきかという実践的のものであつた。況んや世界とは何ぞ、宇宙の本原は何ぞという如き形而上学に至りては、尚更彼等の感興を惹き得ぬ空題であつた。かくの如き国民の間に在りて、独り吾が老子が、夙く既に宇宙の本体を論じ、本体の性質を論じ、更に国家と人生とに論及して、思想の及び得る一切を、その思索の対象としている。

準備なくしては何事も起り得ない。老子の教説も必ず由来するところあるに相違ない。しかしながら吾等は支那の思想界に於て、殆ど彼の先駆をなせる者を尋ねることが出来ない。しかし強いて求めるならば、謂わゆる陰陽家を挙げ得るであろう。不幸にして陰陽家の著書なるものは、一も今日に伝わらぬため、吾等は唯だ間接にその論旨を知り得るにすぎないが、要するに天地の作用を陰陽の二つに分ち、天文氣象と人事の吉凶禍福との関係、換言すれば広い意味で自然と人生との交渉を論ずる学派であつた。その議論は多くの場合に於て、誤れる因果関係を根柢とせるものなりしため、幾多の迷信と誤謬とを含んでゐるけれど、とにかくも宇宙と宇宙間に行われる諸の原理とを思索の対象とせる点に於て、多少老子出現のための予程をなしたと言ひ得るかも知れぬ。かくの如く老子の思想は、本国に於てその思想系統を辿り難きに拘らず、その本質に於て著しくインド哲学と似通つてゐる。もとより或る点に於て老子は、流石に支那の児たる面目を明かに留めているけれど、その教説の大体の結構、殊に宇宙の本体に関する概念に於て、両者の間に著しき類似の存することは、何人も拒み得ぬ事実である。吾等は当時の支那インド間の交通に關して殆ど知るところなきが故に、果して両者の間に歴史的関係あるか、又は単純なる類似であるかを判断することが出来ない。

東西に於ける観者の出現

インドの思想家と同じく、老子は「万物の奥」に潜む本体を認めて、これを「道」と名づけた。而して彼の道は、ウパニシャッドの梵と同じく、如何なる積極的言辞を以てしても表現し得ざるものである。恰もインド人が、梵は「此にも非ず彼にも非ず」との意味で、これを「非・非 Nei Nei」と呼べる如く、老子もまた「道の道とすべきは常の道に非ず、名の名とすべきは常の名に非ず」と言つてゐる。老子は道の絶対であり、無限であり、普遍であることを示すために、或いは「独立して改まらず、周行して殆がらず」と言い、或いは「道は即ち久し」と言つた。従つて道は、人間の感覚や知覚を超えるものでなければならぬ。それに老子は「これを視れども見えず、名づけて夷と曰う。これを聴けども聞こえず、名づけて希と曰う。これを捕うれども得ず、名づけて微と曰う」と言い、或いは「無状の状、無象の象」と言い、或いは「これを迎えてその首を見ず、これに隨いてその後を見ず」と言い、或いは「惚たり恍たり、その中に象あり。恍たり惚たり、その中に物あり。窈たり冥たり、その中に精あり」というが如き章句に於て、秀でたる修辞を以て、道の超感覚的なることを形容している。而してウパニシャッドの作者等も、梵の超絶性を説くことに於て、老子に劣らぬ雄弁を有している。例えば「小さきものより小さく、大なるものより大なり」と言い、或いは「静かに生すれども遠く歩み、横たわれども隨處に往く」と言い、或いは「形象あるものの中にありて形象なく、変化あるものの中にありて変化なし」と云い、或いは「声なく、触なく、相なく、味なく、香なし」というが如き、直ちに移して老子の道の形容たらしめることが出来る。されば老子の道は、イスラエル人のエホヴァ、又は堯舜の上帝の如きものではない。彼は「不仁」・「無欲」・「無教」などの言葉によつて、道の決して「人間的」意思を有せざることを教えて、いる。

道は無象であり、無欲であり、無為である。果して然らば如何にして万物が存立するか。換言すれば唯一絶対の本体が、如何にして差別相対の現象となるか。この問題は当然起るべきものではあるが、老子の余り

I 世界宗教思想史

に重きを置かぬところであった。老子が実在と現象との関係について語るところは、極めて簡単であり且つ明瞭を欠いている。吾等は道德經に於て、僅かに一個處で老子がこの問題に触れたるを見るにすぎない。その一は「反は道の動、弱は道の用、天下の物は有より生じ、有は無より生ず」という説明であり、その二は「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず」という説明である。後者はもし王弼の解釈を正しいとすれば、ピタゴラスの数の哲学を想起するけれどもし「一・二・三」が數詞に非ずして代名詞であり、例えば一は太極、二は両儀、三は三才を意味するものとすれば全く別個の解釈を下さねばならぬ。而して前の説明に於ても、もし「反」の一語を「反対の意味」とすれば、ヘーゲルが一の思想は必ずこれと反対なる思想を潜在的に胚胎し、その潜在的の思想が顯在的となるに及んで、ここに矛盾する兩思想の対立となり、而して両者は一層高度の思想に統一せられ、この第三の思想が更に反対の思想を生んで一層新たなる統一を促し、如是の定・反・合によりて最高の思想に到達するという思想を予想せしめるものである。而も「反」の一語は反復の意味にも取り得べく、従つてこの一節もまた異なる解釈を許さるべきものである。所詮老子の思想は、この点について不明瞭として置く外はない。但し老子の道が世界の構成的原理であることは或いは「無名は天地の始なり」と言い、或いは道を称して「母」と呼び「牝」と呼び「雌」と呼んでいることによつて明かである。而して道は単に宇宙の構成的原理たるに止まらず、同時にその規範的原理たることは、道德經第三十章に於て、天地万物が秩序と調和とを得てゐるのは、すべて「万物の奥」に潜む道によることを説いてゐるので明白である。

而も老子の道は宇宙の構成的・規範的原理たるに止まらず、實に宇宙の究竟目的とされている。或いは「復た無物に帰る」と言い、或いは「物の芸々たる、各その根に帰る。根に帰るを静と曰い、静を復命と曰い、復命を常と曰う」という如き章句に於て、明かに老子は万物の道に還没すべきを説く。こは吾等をして

東西に於ける観者の出現

直ちにウパニシャッドの梵涅槃に想到せしめるものである。

かくの如くにして老子の道は、世界の原因であり、本体であり、且つその目的である。而してウパニシャッドの梵もまた實に世界の起原であり、保持者であり、且つ究竟理想であった。されば精神的生活の客体を説くことに於て、両者は著しき類似を有している。但し更に一步を進めて精神的生活の主体、即ち人間を論するに及んで、最早両者は同一の道を歩むことをしない。互に手を取りて進み来れる支那人とインド人とは、此處でその袂を別つのである。

けだし現象界を以て單に「形影」にすぎぬとするインド人の思想は、老子の同意し得ざるものであった。

老子の世界は眞実の程度に於て遙にインド人の世界の上にある。従つて老子は、インド人の如く世界は無明の薄衣であるとして、その間に存する一切の差別を払拭せんとしなかつた。彼は他の支那思想家と同じく、世界を天・地・人の三範疇に分類し、人は地に法り、地は天に法り、天は道に法ることを説き、人間の最後の理想は、宇宙を綜攬する生命即ち道を現実の生活の上に実現するに在りとした。

然らば人間には道を知り得る能力を賦与されているか。曰く、人間は内面的直觀によりて、至高實在たる道を体験することが出来る。即ち「戸を出でずして天下を知り、牖まどを窺わずして天道を知る。その出ずることと弥よ遠くしてその知ることと弥よ少し」という一節には、重要な思想が含まれている。彼が「民をして無知ならしめよ」と言い、或いは「聖を絶ち智を棄てよ」と言い、或いは「学を絶てば憂なし」と言える如き、総て「出することと弥よ遠くして、知ることと弥よ少し」との意味を敷衍せるものに外ならぬ。老子に従えば、道は決して観察、実験、推理等の如き普通の認識の手段によつて知り得べきものでない。かくの如き外に向けられたる眼は、徒らに道の認識より遠ざからしめるにすぎない。老子は、人間が理智の迂路をいつまで辿ればとて、到底無象無状の道に到達し難きことを知つていた。彼は総ての神秘論者と同じく、内に向けられ

I 世界宗教思想史

たる眼即ち内面的直観によりてのみ、道の認識が可能なることを力説したのである。

既に人間は内面的直観によつて道を知り得るとすれば、如何にしてこれを現実の生活の上に実現するか。換言すれば如何なる行為によりて、人間は道と合体することが出来るか。この問題は、老子の最も重きを置けるものであり、道德経の大半は、實にこの問題に対する解答である。老子の立言は余りに簡潔である上に、極めてパラドックスに富んでゐるため、一見甚だ矛盾を含んでゐるかの如く見える。しかしながらもし吾等にして一たび老子の倫理学の閥門を開くべき鍵を手に入れるならば、表面は自家撞着の如く見える彼の言説の奥に、一貫せる思想の儼然として横たわるを見ることが出来る。その鍵とは何ぞ。曰く老子の謂わゆる「三宝」である。然らばその三宝とは何ぞ。彼の言葉を以て言えば、一に曰く慈、二に曰く儉、三に曰く敢えて天下の先と為らざることである。これ等の徳目は、決して抽象的に思索されたのではない。人間が道と合体することは、取りも直さず道の徳性を吾が徳性とすることである。而して老子は、その透徹せる洞察によつて、道の天地に流行するや、慈を以てし、儉を以てし、讓を以てすることを認め、直ちに移してこれを見間の「三宝」としたのである。

第一に慈とは何ぞ。彼の慈は、普通に言われる仁又は愛とは、著しくその趣を異にする。そは實に一切を抱擁する至大至深の同情であり、法華経の薬草喻品に現れたる如來の大慈大悲に比ぶべきものである。例えば三千世界に無数の草木がある。或いは小根小莖、或いは中枝中葉、或いは大幹大枝、色も品も千種万様であるが、黒雲天を蔽いて潤雨沛然と降り注げば、柳はいよいよ緑に、花はいよいよ紅に、一々の草木、みなその分に応じて水を吸い、葉を茂らし花を咲かせる。降り注ぐ雨は一味なれど、一切の草木をして各別の成長を遂げさせる。天地間の万物は、ことごとく一視同仁の道によつて生きている。人々はこの広大なる道の慈悲に則り、善惡・賢愚・利鈍を問はず無平等の愛を同胞に注がねばならぬ。もし此處に根柢を有せざ

東西に於ける覚者の出現

る愛の如きは、所詮舐^{したたか}犢^{しむし}の愛にして、徒らに人生の繁雜を招くに終る。これ老子が「天地は仁ならず、聖人は仁ならず」と言い、或いは「仁を絶ち義を棄てなば、民孝慈に復らん」と言い、或いは「大道廃れて仁義あり」という所以である。けだしこれ等の章句に用いられたる仁の意味は、差別的愛を指すものに外ならぬ。賢を愛し、善を好み、愚を忌み、惡を憎むは、人生の常套事である。されど人は愚と惡とに対しても、賢と善とに対すると同じ愛を以てせねばならぬ。人々はその心の底に、尽きざる愛の泉を掘り出さねばならぬ。而して表現の形式は、機に臨み変に応じて如何ようにもあれ、常に一味の無我愛を抱いて人生に処されねばならぬ。かくして老子は、怨に報ゆるに徳を以てせよという驚嘆すべき教訓を示した。而して彼はかくの如き慈より勇の意義を点じ来りて「慈は以て戦う時は即ち勝ち、以て守る時は即ち固し」と説きて、眞実の勇気は愛より來ることを教え、もし然らざるものには畢竟強暴にすぎざるを説き、「慈を棄てて勇なる者」に對しては「かくの如きは死なん」と大喝している。凡そ老子の言説は、大体に於て消極的であり、従つて否定的であり、その書を読む者をして、辛辣なる諷刺家の冷語を聴くの感に堪えざらしめる。而も彼が一たび慈を説き、更に慈より勇を演繹するに及んで、俄然として光焰万丈となり、消極否定の教義、一時に神采を放つて、直ちに吾等の情緒に訴えて来る。

第二に僕とは何ぞ。僕とは決して財物を節する意味ではない。そは道徳經第五十九章に「天に事^あうるには嗇^{すく}に如くはなし」と言える嗇と同意義で、自己即ち小我を制御することである。彼はまた「惟だそれ嗇なり、これを以て早く復る」とも言つてゐる。老子が僕又は嗇又は微を力説したのは、小我を制御することによつて道に復帰すべきことを教えたのである。かくして吾等は老子の「無為」の教理を理解することが出来る。無為は老子の最も好んで力説せる徳で、道徳經中隨處にこれを説いてゐる。その絶好の一例は「為す者は敗れ、執る者は失う。聖人は為す事なし、故に敗るることなし。執る事なし、故に失う事なし」という一節で

I 世界宗教思想史

ある。老子によれば、一己の私智を恃んで天地の作用に何ものかを加えんとし、もしくはその運行を阻礙せんとする如きは、蠟螂の臂を怒らして車轍に当ると等しく、自らその任に堪えざるを知らぬ者である。むろ人々は、我意を去り、執着を去り、恃むところなく、居るところなく、唯だ天地の運行に乘托し、その雄を知りて而もその雌を守り、その白を知りて而もその黒を守り、その明を知りて而もその暗を守り自己の思慮を制して、天地の經營に没入すべきである。かくしてこそ人間は「早く道に復る」ことが出来る。吾等は老子のこの無為の教義を人に向つて袖手懶惰の生活を奨めるものと誤解してはならぬ。彼は一己の私智を排斥した。そは天桂禪師が「何なりとも心に慮り分別に測ることは、皆これ顛倒なり」と言えるに等しい。彼は人間の思慮分別を斥けるけれど、同時に人間を通して顯われる道に対しては、無限の尊敬を払う。唯だそれが自己の行為に非ず、自己の衷に流行する道の発現なるが故に、これを人間の立場より無為と呼ぶだけである。

最後に敢えて天下の先と為ら^なとは何ぞ。そは儕と同じく自我を主張せざることである。即ち儕は天地に対して自我を主張せざること、天下の先と為ら^なとは人間社会に対しても自我を主張せざることで、恐らく「譲」の一語を以てこれに代えることが出来る。膏火は光明を与えるが故に人に焚かれ、漆は用うべきが故に人に割かれる。人に示すに才を以てし、他に向つて己れを主張するのは、唯だ禍を招く所以である。聖人は己れを虚しゆうして天下に処し、天下功を彼に帰するも、彼は却つて功を天下に帰する。己れの智を尊ばざる故に、智者も彼を脅すことが出来ぬ。功を天下に誇ることなき故に、天下も彼を誹ることが出来ぬ。恰も水の方円に従い、東西南北、唯だ人の決するままに流れるに拘らず、能く猛火を消し、万丈の堤を破り、堅城をも抜く如く、聖人は弱きが故に強きに勝ち、柔きが故に剛きを制し天下を先にするが故に天下の先となるのである。されば人々は、その天分を存分に發揮するために、先ずこれを發揮せんとする意志を放棄せ

東西に於ける観者の出現

ねばならぬ。小さき意志の否定は、やがて大なる意志の肯定である。謙讓は高きに登らしめられる原因となり、無欲は与えられる原因となり、不幸は勝たしめられる原因となる。かくの如くにして老子は「敢えて天下の先と為ならず、故に能く成器の長たり」と結んでいた。

吾等は三宝によつて道を吾等の生命の上に実現することが出来る。吾等はこれによつて「天地と並び生じ、万物と「なること」を体得して、利害、榮辱、苦楽の繫縛を超越することが出来る。これが老子によつて宣伝せられたる福音である。而して彼の後継者莊子は、その華麗なる文章を以て老子の説教を敷衍し、殊に世界を以て道の発現とする思想を展開して、徹底せる無差別觀を唱えた。吾等は老莊の宗教が、極めて高き段階に到達せるものなること、並びに老莊の信仰に殆ど何等の迷信をも含まぬことを驚嘆すると同時に、後代に至つてかくの如き高遠なる哲学的神祕教が、支那の民間信仰と相結んで謂わゆる道教となり、老莊の真個の精神が甚だしく歪曲されていることを悲しむものである。

三

孔子は殆ど老子と時を同じくして支那に出現せる観者であり、支那精神の最も善き體現者なりしが故に、今日に至るまで支那の精神界に王座を占めている。孔子は決して普通の意味に於ける思想家でも宗教家でもない。その夢にしばしば周公を見たという告白は、孔子一代の希望が治国平天下に在りしことを物語る。従つてその最後の目的は政治家としての活動であった。唯だ彼が志を得なかつたために、支那は比類なき人間の教師を得ることになつた。孔門第一の高足顏回は、孔子を讃えて、これを仰げば弥よ高く、これを鑽れば弥よ堅し、これを瞻るに前に在り、忽焉として後にありと言つて居る。この嘆美を見ても、教育家としての孔子が、如何に大なる感化をその弟子に与えたかを想像するに難くない。

I 世界宗教思想史

教師としての孔子は、その弟子たちに向つて哲学を説くことも、また宗教を説くこともしなかつた。彼は聰明なる子貢をして、夫子の性と天道とを言うは得て聞くべからずと嘆かしめたほど、形而上学について口を緘していた。彼はまた鬼神に事えんことを問える季路に対して、未だ人に事うこと能わず、焉んぞ鬼に事えんと答え、更に死とは何ぞと問えるに対し、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんと答えている。孔子は從来の宗教的信仰に對して何等の積極的批判を加えて居らぬのみならず、既に一定の慣習となれる宗教的儀式には、最も忠実なる一人であつた。而して彼のこれ等の儀式に對して抱ける心理は、思索的でも神秘的でもなく、飽くまで実際的のものであつた。即ちそれ等の儀式は、社会の善良なる秩序を保つ實際上の効果がある限りに於て、孔子の尊敬を贏ち得たのである。

孔子の主題は、常に人間そのものであつた。而して彼の教育の主眼は、人格の鍛練に外ならなかつた。如何にして「君子」即ち完全なる人間となり得るか、君として父として夫として兄として如何に吾等は処すべきか、臣として子として妻として弟として如何に吾等は処すべきか、これ等の問題に對する弟子の質問に對しては、彼は教えて倦むことを知らぬ教師であつた。而も代表的支那人として、孔子は恐ろしきまで実際的であり、その弟子たちが、孝とは何ぞ仁とは何ぞと問えるに對して、問者によつてことごとくその答を異にしている。彼は直ちに言下に実行し得べき當面の道徳を教えんとしたのである。

さりながらもしこれ等の事實より推して、孔子の道徳には統一的原理がないと言うならば、そは甚だしく孔子を誣ゆるものである。孔子は明かに吾道は一を以て貫くと言つてゐる。而してこの一貫の道ありたればこそ、彼は人により機に応じて、自由に適切なる道徳を説き得たのである。一日彼は汪洋たる大河の畔に立ち、黙然として流れて息まぬ河水に眺め入つて、逝く者はかくの如きか昼夜を舍かずと言つた。この短き言葉は、唯だ深き宗教的体験ある者の唇よりのみ洩るべきものである。

支那民族の天に対する信仰は、孔子の人格を通して高貴なる宗教に醇化させていた。

孔子は彼以前の支那人と同じく、天は自然を通じてその意志を人間に伝えるものと信じていた。而してこの自然を通じて現れる天意に対して、如何に孔子が敬畏の情を抱いていたかは、彼が迅雷風烈に際して必ず色を変えたとあるによって知られる。また孔子は、鳳鳥至らず、河図を出さざるは、天が当時の社会に対して好意をもたらすためであるとし、吾已んぬる哉と嘆じている。天は彼にとりて最後の審判者なるが故に、天を罪に獲れば禱る所なしと言い、また、吾誰をか欺かん、天を欺かんやと言っている。吾等は、丘の禱るや久しと言える彼自身の言葉によりて、孔子が常に天と相交わっていたことを知る。而して多くの偉大なる宗教家に於て見る如く、彼は天下に道を宣伝すべき、特別なる天の使命を負いて世に出でたる者と確信していた。それ故に、或いは陳蔡の野に飢えた時にも、或いは桓魋のために一命を失わんとした時にも、彼は堅く天の加護を信じて、怖れるところ無かつた。天、徳を予に生せり、桓魋それ予を如何せんと言ひ、天の斯文を喪ぼさずば、匡人それ予を如何せんと言ひうのが、實に孔子の信念であり、抱負であつた。

孔子は唯だ自己に忠実に生くる人が、当然到着すべき点に到着せるものと言ひ得る。自己の完全を希う厳肅なる要求に忠実なる人は、もし精進して息むことなれば、いつかは孔子と同じく超個人的生命の実在を認め、自己の生命をこれに帰一せしめることによつてのみ、能く自我の完成が成就され得ることを覚るであろう。孔子は自ら十有五にして学に志したと言つてゐる。爾來彼は倦むことなく息むことなき学道の人であつた。彼は特別なる天の啓示を求めることもなく、遼しき頓悟を求めることもなく、自ら下学して上達すと言つて居る如く、日常卑近の事に処して往く間に、天を知り得る人格を築き上げた。彼は自ら五十歳にして天命を知つたと述べてゐる。その後も彼は憤りを発しては食を忘れ、樂しんでは憂を忘れつつ、老の至らんとするのも知らぬ様子で、飽くまでも登高の一歩を踏んで往つた。吾を知る者はそれ天かと言える孔子の

I 世界宗教思想史

言葉には、悲壯なる響が籠つてゐる。孔子の志は、政治の実際に当つて理想的国家を実現するに在つた。そのためには彼は諸国を歴遊し、多くの政治家と談を交わしたが、遂に彼を用いる者がなかつた。多くの弟子が彼を取扱んで居た。されど眞に孔子を理解し得るものは多くなかった。彼は唯だ曠世の偉人のみが感ずる無限の寂莫を感じたに相違ない。而してこの寂莫は、総ての他の偉人の場合と同じく、唯だ天によつてのみ慰められ得べきものであつた。かくの如くにして孔子は七十歳の高齢に達し、心の欲する所に従つて矩を超えた。天人帰一の境地に到達した。彼は現世に於ける生存の時期が、最早幾年をも余さぬことを知つても、決して死後の生活を求めなかつた。彼は朝に道を聞いて夕に死すとも可なりと云う比類なく高貴なる宣言によつて、天に連る生命の不滅を立証してゐる。花は開き、花は落つ。花はこれに満足する。天人帰一の生活に何の未来ぞ。かくの如き人は、恒に永遠の現在に生きる。

さて孔子の死後二百年にして、儒教のボーロ孟子が現れた。而してかつては一個地上の人間なりし孔子は、孟子によつて聖化せられ、人間の極致、行為の完全なる模範とされた。孔子の徒は、これによつてその渴仰の情を満足させられた。彼等はこれによつて伝道の好旗幟を得た。而して孔子の教はこの時初めてその翼を天下に伸ばすべき時期に到達した。

四

支那に於ける一人の覚者を述べ終えて、吾等は次でギリシャの偉大なる教師について述べべき順序となつた。

ギリシャは、ペルシヤの大軍を打退けてから、その国民生活は頓に隆盛に赴き、燦然たる人文の花が、一時に美しく咲揃つた。この時に於てギリシャ人は在來の国民的諸神を信じていた。而してこれ等の神々に対

東西に於ける覚者の出現

する信仰は、新たなる力を以て復活し、神々の姿は益々純なる美しさを具えるようになった。ギリシャの中 心なるアテネは、今や狭き国土の上に軍隊と貴族とによりて支持せられたる国家に非ず、海上を支配し、世 界貿易の霸權を握れる第一位の海軍国並びに商業国となつた。而して東方諸國の文化が盛んに輸入せられ た。

しかしながら古代ギリシャの文化は、夙くもこの時に於て、悲しむべき頽廃の路を辿り初めた。ギリシャ はその色最も美しくして、その核既に腐り初めし爛熟せる果実であった。新に各種の文化を攝取して成れる アテネの世界文明は、從来の社会生活の根柢を動かし初めた。而して殊にこの勢いを助長したのは、ソフィ ストと呼ばれし学者連であった。彼等は謝礼を受けては知識を授けつつ、ギリシャの町々を歴遊せる教師で ある。頗に活気を帶び来れる政治舞台に、花々しき役割を演じようというような野心家等は、百般の学芸に 通ずる必要があつたので、多額の報酬を払つてソフィストの弟子となつた。書齋の学問を実生活に役立たし めた点に於て、ソフィストは人文史上に大なる貢献をなして居るけれど、ギリシャにとりては不幸なる結果 をもたらした。

ソフィストは、その実用上の目的から、諸家の学説を研究して、異説の遂に帰するところなきを見た。而 して現実の社会に於ては、反対する思想がいすれも真実らしく行わされている事實を見た。彼等はかくして懷 疑論者とならざるを得なかつた。彼等は普通の真理なるものを否定し、人間が一切の尺度であると考えた。 彼等は道徳・法律・風俗・習慣は、人間が便宜のために勝手に定めたものにすぎないから、もし不便を感じ るようになれば、また隨意にこれを抛棄してもよいと教えた。かくの如き議論が實際生活に適用されるよう になれば、社会の秩序は紊乱し、道徳風俗は破壊されざるを得ない。而してギリシャ在來の宗教的信仰も、 またこれに伴いて動搖し始めた。吾等は旧き宗教が次第にその力を失い往く道筋を、エスキロス、ソフォク

I 世界宗教思想史

レス、オイリピデスの戯曲に於て辿ることが出来る。かくしてペリクレスの光栄ある時代も、朝の露、夕の虹の、美しくして而も果敢なきものとなつた。ギリシャはこの時以来唯だ頽廢の坂を降つて往つた。第一流の人物は次第に政治から遠ざかり、アテネは衆愚の跋扈する舞台となつた。旧き思想は破壊されて、代るべき新しき権威は未だ確立されなかつた。人々は表面はなお古来の神々に執着していた。されどその心の中では最早これ等の神々を崇拜することが出来なくなつてゐた。この破壊的風潮を阻止し、アテネの民に新しき権威を与えるために現れたのが、即ち吾がソクラテスである。

ソクラテスは、極めて醜い外貌の裡に、諷刺家の機智と、殉道者の熱誠と、哲学者の頭脳とを包める比類なき人格であつた。彼は常にアテネの町々を徘徊して、何人でも彼に耳を藉す者と対話を試みた。彼は人間は単なる生命に非ず、善き生命を求めねばならぬことを教えた。彼は人間の精神的本質に深く探し入りて、万人を貫く普遍なる理性を闡明し、この上に堅固なる道徳を建設せんとした。彼は自己の心裡に、常にダイモンの囁きを聴いていた。ダイモンとは何ぞ。そは人間の衷に儼存する神である。彼の理性は、ギリシャの多神教の矛盾を看過することが出来なかつた。彼は宇宙を以て一神の支配の下に在ると考え、一切の美、絶対的な知慧と美が、皆なその獨一の神に帰せらるべきものなることを見た。

彼は無学なる野人の如き態度で、最も平俗なる言葉を使い、何人も笑わずに居れぬ滑稽を交えて、産婆が妊婦の出産を助けるように、人々の心の奥に潜む真理の出産に力を貸した。アテネの青年は次第に彼に惹付けられた。彼の評判は高くなつた。而して愚者の仮面の中に、自己の信仰を鼓吹するものなることが、次第に知れ渡つた。かくて彼は保守的思想家のために、民衆の信仰を覆えし、青年を腐敗せしめる者として、遂に裁判官の前に告発された。彼は民衆に媚びる無定見なる政府の前に、自己の信仰を枉げることをしなかつた。彼は神の唯一なること、靈魂の不滅なることを、最も頼母しき確信を以て宣言した。そのため彼は死

東西に於ける覚者の出現

刑を宣告せられて獄に下つた。彼は一切の汚辱を牢獄から取去つた。彼の居る間牢獄は牢獄でなかつた。彼はその弟子が獄吏に贈賄して彼を救わんとする「無智なる好意」を斥け、毒を仰いで悠然としてその神の許に帰つた。而してソクラテスの志は、その至愛の弟子プラトンによつて繼承され、その教説の最も深き部分が、彼によつて發揮された。

五

さて古代に於て最も宗教的なりし国民は、アーリヤ民族のうちではインド人、セム民族のうちではイスラエル人である。然るにアーリヤ民族とセム民族とは、太古から神と人との関係、また神と世界との関係について、謂わば対蹠的な観念を抱いていた。即ちアーリヤ民族は人間及び世界に内在する神性に重きを置き、セム民族は神の優越性及び超絶性を高調して來た。かくの如き相違は、両民族が各自の神に与えた名称に於て、夙く既に明かに現れて居る。即ちセム民族の諸神は、怖るべき威厳を有する権威者として写象せられ、バール即ち主、モロク即ち王、エル即ち超在者、イル即ち至尊者等の名を以て呼ばれていた。イスラエル人が彼等の神エホヴァを、王又は主と呼んでいたことは言うまでもない。總じて神々は、遙に人間と自然とを超絶せる偉力者である。然るにアーリヤ民族は、治者又は主人の名を以てその神々を呼ばず、常に親愛の情を籠めてこれを父又は母と呼んでいる。例えばインドの梨俱吠陀に於ては、最高の十柱の神々を父と呼び、ギリシャ人もその至高神ゼウスを父と呼び、ローマ人もこれをジュピテルもしくはマルスピテルと呼んだ。ピテルは言うまでもなく父の意味である。而してゲルマン人も、またその最高神オーデンをアルファデル即ち万物の父と呼んだ。

神人同格及び神人懸隔の傾向は、宗教が進化のきざはしを登るに伴つて次第に顯著となり、既に述べたる

I 世界宗教思想史

如くペルシャのツアラトウストラ、インドのヤージュナヴァルキヤの宗教に於て、明白に汎神論的信仰となつて現れている。けだし多神教の矛盾と不完全とを救うためには、下の二つの途のいずれかを取らねばならぬ。即ち獨一の至高神を立てて、一切の自余の神々を否定するか、又は一切を以てことごとく一神の表現とするか、換言すれば超在一体教即ち一神教か、又は内在一体教即ち汎神教かの孰がれか一つである。而してこの際神人同格の信仰が万有神教に発達し、神人懸隔の信仰が超絶神教に発達することは極めて自然である。この後者の絶好の実例は、キリスト教の先駆をなせる古代イスラエルの予言者等の信仰である。

もとイスラエルの国民とその神エホヴァとの間に、他の国民の間に見出し得ぬほど、親密なる関係があつた。彼等はエホヴァの寵民であり、エホヴァは彼等の守護者であつた。而して恐るべき新興の強国が東北に崛起し、イスラエルの国歩艱難を極めるに及んで、彼等の或る者はエホヴァの力に対して疑惑を抱き始めたけれど、多数の国民はなおエホヴァに対する信頼を棄てず、エホヴァが晩かれ早かれイスラエルの民をその窮厄の間より救い、彼等の憎むべき敵はことごとく誅伏せられ、光榮ある「主の日」のやがて来るべきことを信じて、自ら慰めていた。もしかくの如き時に、一群の偉大なる宗教家が現れなかつたならば、エホヴァに対する信仰も、非常に異なる方向に発達したかも知れなかつたが、相繼いで出現せる諸の覚者によりて、イスラエルの宗教も正しき路に導かれるを得た。

もとエホヴァの特質を正義と公明とに認めたことが、實にイスラエル人の宗教思想の中核であつたが、エホヴァのこの道徳的本質が、東方アッシリヤ帝国の降興に連れて、イスラエルの国運漸く危胎に瀕せる時に及んで、俄然としてその頂点に達せしめられた。吾等はイスラエルの六大予言者の先頭たるアモスの信仰に於て、先ず比類なく高調せられたる神の道徳的概念を認める。この篤信なる牧者が、野に羊を追いし際に、深くその心に浸み込める正義の神エホヴァの概念は、イスラエルの宗教をして、從来の民族的束縛より超出

東西に於ける覚者の出現

せしめる転機となれる、下の言葉を以て言い表わされている。曰く、イスラエルに三つの罪あり四つの罪あらば、エホヴァ必ずこれを罰して許さじ、即ち彼等は義者を金のために売り、貧者を鞋一足のために売ると。

見よ、アモスに至りて、エホヴァは最早イスラエルだけの神ではなくなつた。イスラエルはエホヴァの寵民であつてもエホヴァは私情によつて彼等の不義と罪悪とを許す神ではなくなつた。エホヴァの惡み給う不正と不義とを敢えてしながらイスラエルの民が「主の日」を待望んで、果して何の甲斐あらうぞ。もとより「主の日」は来るであろう。而もその日はイスラエルに取りて「暗くして光なき日」であるであろう。虎視耽々としてひたすら侵略の機会を窺いつつありしアッシリヤ帝国は、アモスの目には、神意に背けるイスラエルを罰せんとするエホヴァの鞭に外ならなかつた。

かくの如くにしてエホヴァは徹底せる正義の神となり、イスラエルとエホヴァとの関係は、血縁を離れて純然たる道徳的のものとなつた。而してアモスに於ては、微ながらもなお残存していた民族的色彩を全然払拭し去りて、エホヴァが場所を超越し、礼拝を超越し、国民を超越せること、換言すれば全世界の主たることを、最も鮮明に宣告したのは、實に六子言者の第四者エレミヤその人であつた。恰もアモスの時代に、アッシリヤがイスラエルを脅威していたように、エレミヤの時代にはバビロン帝国がその最も恐るべき敵であつた。而してエレミヤもまたアモスと同じく、下のようによつて選ばれた。曰く、バビロンは神によつて選ばれたるイスラエルの民を亡ぼすかも知れぬ。而もこの事は些かもエホヴァの尊嚴を傷つけることはない。すべての国々は、強きも弱きもことごとく神の支配の下に在る、エホヴァの手には万国を懲らす鞭がある。世界を脚下に蹂躪して勝利に驕るアッシリヤもバビロンも遂に審判の日の来るを免れることが出来ぬ。神こそは全世界の主である。世界と世界に在る一切のものは、ことごとく神に属していると。

I 世界宗教思想史

イスラエルの宗教は、エレミヤに至りて、正しく完全なる一神教になった。而してこの一神教は、決して哲学的思索の結果に非ず、徹底して道徳的要求の結果であった。理想は唯一でなければならぬ。而して最高理想の権化たる神も、また獨一でなければならぬ。かくしてエホヴァは、唯だ善を人間に要求する世界の支配者となつた。従つて神を欣ばす真個の犠牲は、心情と行為との犠牲であるとされた。かくの如くにしてイスラエルの予言者の宗教は、キリストの福音の予程をなしたのである。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.Com

キリスト及びキリスト教

—

予言者の警告が痛ましき事実となりて、イスラエル人の頭には、峻烈なる神の笞が加えられた。自らエホヴァの寵民を以て矜れるイスラエル南北両朝のうち、北方イスラエル王国は、西紀前七二二年アッシリヤ王サルゴンの為に亡ぼされ、南方ユダヤ王国は、西紀前五八六年バビロン王ネブカドネザルのために征服された。勝誇れるバビロン軍は、見る影もなくエホヴァの神殿を毀ち、飽き足るまでエホヴァの選民を屠り、その肉を天の鳥・地の獸の餌食に与え、その血を河の如くエルサレムの周りに流した。而して生残れる人々を、無残にも廃殘の聖都より軀り立て、ことごとくこれをユーフラテス河畔に拉し去つた。これ即ち名高きバビロン虜囚である。

バビロン虜囚中のユダヤ人は、眞に慘めなる状態に在つた。されどかくとも彼等はエホヴァの宗教を離れようとした。エホヴァは依然として彼等の事える唯一の神であつた。或る時は彼等は血を吐く声をあげて、神よ如何なれば汝は吾等を限りなく棄て給うぞ、海は長えに怒りを続け給うか、汝の嫉みは火のように燃えて消ゆることなきかと訴えた。或る時は彼等を虐げ、神をないがしろにせるバビロン人に、シオンの

SAMPLE
Shinshi-Shinsui.com